

岡崎嘉平太記念館

だより Vol. 22



嘉平太氏が出会った人々

みわ じゅうそう 三輪 壽壮 氏

明治二七〜昭和三一（一八九四〜一九五六）年。弁護士、社会運動家。福岡県出身。一高時代柔道部員、全寮委員長。東大在学中「新人会」に入る。卒業後は弁護士として労働争議・小作争議などを手がけた。大正十五年には労働農民党を結成、書記長となり昭和七年の社会大衆党創立にも参加した。同十二年には衆議院議員（東京）に当選。戦時中、大政翼賛会などに参加したため、戦後公職追放になったが、解除後は日本社会党から出馬し三回当選、右派の長老として活躍した。岸信介元首相ら保守政治家や財界人に一高時代の知己が多かった。



▶ 第一高等学校ボート部の仲間と。二列目中央が嘉平太氏。（大正八年四月）

東大時代には、マルクス・レーニン主義を研究する学生の集まりで「新人会」というのがあって、宮崎竜之介は新人会のリーダーみたいなものだったんです。私を「新人会」に連れて行ったのは三輪壽壮という非常に立派な人で、もう亡くなりましたけれども、今でも尊敬している人です。三輪さんは体が大きく力のある人で、柔道が得意で、三輪投げというのが有名になる程強かったんです。しかし非常に性質の立派な人で、三輪さんに教えられたというのは今でも光栄に思っているんです。

三輪さんは僕より二年先輩で、高等学校ではボート部の選手をしていました。高等学校から大学に行ったらね、彼から、「おい岡崎、ちよつと来い」と言われて、新人会の集会へ連れられて行って、一年半くらいは新人会で共産主義の勉強をやったんです。新人会では悪いことするとか無茶をする人もいない。また、殊に三輪壽壮さんがりっぱな人だったから、僕ももう少し若かったら共産主義になつていたかも知れない。当時、まだ僕らも共産主義について納得がいけない間に、東大の共産主義の連中が実行運動をやり出したんです。

それであるときに三輪さんが、「岡崎君、大塚の市街電車の車庫に行つて、車掌や運転手を相手にアジつて来い」と言われたんですよ。僕はそのとき言ったんです。「僕は今、共産主義がいいか悪いかは別として研究しているんです。まだ納得がいけないから実行運動はやりません、やりたくない」と言ったんですよ。「そんなことを言つとったんじゃ前線に立てないぞ」と言われた。けれども、「納得がいけないものを実行運動をするのはいやです」と、どうとう別れたんですがね。

（中略）三輪さんが代議士の頃、会いに行つてね、「三輪さんが本気で政治を続けておやりになるなら、僕も当選するかどうかは知らないけれども、代議士になつてあなたの下でお手伝いしましょうか」と言ったらね、「岡崎君、もう駄目だよ」と言う。当時の社会党に諦めを付けたんじゃないですかね。それで私はどうとう政治に入らなかつたんです。今から思えば、当時、共産主義をある程度理論的に勉強したことは良かったと思いますよ。

（岡崎嘉平太伝刊行会編集「岡崎嘉平太伝」平成四年初版発行より）

秋の特別企画展「人間 岡崎嘉平太の魅力」 開催

平成26年9月22日(月)ー12月26日(金)

人間的な魅力
豊かな心

このたびの企画展では、嘉平太氏が多くの人から敬愛されたその人柄や、生活や趣味など人間的な魅力に焦点をあてて紹介しました。

初公開の資料も多く、期間中は1,451人の来場者がありました。

このたびの80点の展示品の一つ、時子夫人手製の革靴には、嘉平太氏のイニシャルが入れられており、訪中や貯蓄増強運動で全国を講演して廻るため、旅に出ることが多かった氏のために夫人からの心遣いを感じました。右の写真は、孫と遊ぶ表情が柔らかく、印象的でした。



孫と遊ぶ嘉平太氏
(昭和50年頃)

このほか嘉平太氏の多様な趣味の用具や記録からは、多忙ななかにあっても余暇を見つけ人生を楽しむことにも長けていた姿がうかがえました。

冊子『晩晴』は、漢詩や日本の古い詩を抜粋するとともに、昭和18年から52年迄の自句がしたためられており、氏の心情がよくうかがえました。



「晩晴」の一頁

来館者は、「母の言葉や愛情が彼の人格を育てたのだと思う」、「コンパクトな展示ながらも魅力が十分に伝わり心が温まった」と感想を寄せてくださいました。

下の写真は吉備中央町立大和小学校6年生が学習に来た際に撮りました。本展開催にあわせて、嘉平太氏の母校大和小学校の全校生徒が、氏を思い描く言葉を書にあらわした作品を一堂に展示しました。「ふるさと」、「友」、「団結」などが書かれていました。



「岡崎嘉平太がめざした世界平和への道を考える 第13回講演会」開催

平成26年11月24日(月・祝)

日中友好を軸にアジアの安定
ひいては世界の平和を願い、
行動した嘉平太氏から学ぶ



井上 正也 先生



朱先生(右上)と岡崎 彬
(嘉平太氏ご子息)御夫妻

シュ キンダク

このたびは、講師に朱金諾氏(全日本空輸(株)マーケティング室常任理事)をお迎えしました。朱先生は、昭和53年夏に嘉平太氏から通訳としての随行を請われ、始めて岡崎嘉平太訪中団に同行、以来、嘉平太氏が平成元年に戦後百回の訪中を果たすまで通訳として随行されました。朱先生は、「日中友好の架け橋岡崎嘉平太先生の思い出-今こそ

岡崎精神で日中友好の絆を-」と題し、「岡崎先生のご精神を受け継ぎ、日中友好を、さらにはアジア、世界平和に向けて夢を語る」と話されました。もう一方の講師に井上正也氏(香川大学法学部准教授(国際関係論・日本外交史))をお迎えしました。井上先生は、「歴史としての日中民間貿易-岡崎嘉平太とLT/MT貿易の軌跡」と題し、昭和29年に中国との貿易を促進する目的で設立した日本国際貿易促進協会発足から財界を巻き込み、やがては嘉平太氏の信念と筋道がつながる経過を話されました。

本会には、岡山県内外から150人の参会者がありました。本記録は、冊子にまとめ後日発刊します。



嘉平太と蔵書

昨年9月22日から12月26日まで「人間岡崎嘉平太の魅力」をテーマに秋の特別企画展が開催された。嘉平太氏は、日中友好に生涯をささげるとともに多くの会社の再建や設立に携わるなど経済界で活躍した人として知られている。

この企画展では、嘉平太氏のあまり知られていない家庭人としての姿や趣味などに焦点をあてて紹介した。その中で数冊の本を展示したが、そこには嘉平太氏の本に対する思いや姿勢を伺うことができる。

大変な読書家だった嘉平太氏、記念館には遺族から約四千冊の本が寄贈されている。中国の歴史や文学をはじめ、ドイツ文学や日本文学、政治、経済、金融、航空そして文庫本にいたるまで多岐にわたっている。政治家や知人、友人などから贈られた本も多くあり、著者や知人などの書簡や名刺等が本と一緒に残されている。

本の文中には書き込みやアンダーライン、また、巻頭や巻末には、嘉平太氏の本に対する感想や贈ってくれた方への思いなどが書き残されている。そして、大切にしていた本には「岡崎蔵書」の印が押されている。嘉平太氏が書き残した「感想や思い」のいくつかを紹介する。

『貧乏物語』

(河上肇著 岩波書店 1947年)

「昭和二十五年頃求之。大正八年第一高等学校を卒する頃 本郷の一書店にて貧乏物語を購ひよむで深き感激を覚え、社会主義に心を傾

らるに到った。その当時の本を失ったので戦後之を求めて昔を懐しむよすがとする也」

『日向』

(中村地平著 角川書店 1957年)

「九州貯蓄旅行に際し日本銀行宮崎事務所長松本氏の好意により贈られて旅中読む。昭、三二、十一、十七日より」

『経済の法則を求めて』

(柴田敬著 日本経済新聞社 1974年)

「一九八四、一、二四 和歌山市紀陽銀行の専務若名浩氏より受領す、九二頁に僕の写真あり。」

『高杉晋作 維新前夜の郡像1』

(奈良本辰也著 中央公論社 1984年)

「一九八四年七月二日贈 中国新疆ウイグル自治区烏魯木齊(ウルムチ) 迎賓館一〇二号室にて読み終える。嘉平太記」

嘉平太氏の蔵書は膨大で、本を贈ろうとした知人が、書斎から廊下にあふれ出た蔵書を見て、本より本棚を贈ったという逸話もある。

現在、改めて蔵書のを見返しているが、その中で嘉平太氏の思いに触れる新しい発見があればと期待している。そして機会があれば、蔵書をテーマにしたミニ企画展の開催も検討したい。

岡崎嘉平太記念館館長 神原 清

中国文化に親しむ講演会 開催

平成27年1月20日(火) 会場:吉備中央町ロマン高原かよう総合会館

講師に増田秀樹氏(NHK大型企画開発センターチーフ・プロデューサー)をお招きし、「中国至宝からのメッセージ～NHKスペシャル「故宮」を制作して」と題して講演をしていただきました。岡山県内から100名の参加者がありました。

増田先生がチーフ・プロデューサーとして制作され、昨年放映された、NHKスペシャル「シリーズ故宮」は、中国歴代王朝に受け継がれてきた文物を所蔵する台北・国立故宮博物院の特別な宝を2回に渡り、最新の8Kカメラで撮影した美しい映像で紹介した番組です。



増田 秀樹 先生

増田先生は、取材を進める中で、中国人との美意識の違いに戸惑った経験を北宋の詩人・蘇軾フシヨクの書「黄州寒食詩巻」コウシュウカンシキョウカンを例に示し、「中国の人が、蘇軾の経歴や書かれた時の心情などの背景も含め作品を愛でることを知り、面白いと感じた。美意識の違いや違和感を楽しみ、相手がなぜそれを素晴らしいと感じるか探究する姿勢から互いの理解につながっていくのでは」と述べられました。

岡崎嘉平太著『サラリーマンの人生経営』の紹介 2回目

入手が難しい嘉平太氏の著書を抜粋して、数回に分けて紹介しています。このたびが2回目。

本書は、昭和35年(嘉平太氏63歳。氏は、昭和36年に全日本空輸(株)代表取締役副社長から社長に就任した)が初版です。本書の内容は、氏が座談会などで、多くの場合、若いサラリーマンに向け、自身の体験を飾り気なく話したことをもとに、実業之日本社に請願され、本に起こしたものです。

■就職と結婚と退職—就職昔と今

私は、職業を選ぶのに、相当まよった。学生時代に、ちょっと社会主義の研究をやったことがあり、実際運動には加わらなかったが、その方面の著書を読みあさっていたので、実業家というか、いわゆる営利を目的とする職業はいやだと思った。(中略)官庁でもなければ、営利会社でもない日銀に入ることを決心、願書を出した。当時の日本銀行は、こんにちとは全然ちがって、中央銀行の役目はあったが、経済恐慌とか、あるいは戦争というような特殊な事態が発生しないかぎり、いわば、閑古鳥がなくといった感じの、温室的沈滞感が充満していた。(中略)日銀から閑古鳥がにげだしたのは、私がいって翌年の関東大震災からで、以降は始終その活動が要請されるようになった。関東大震災、昭和2年の金融恐慌、大東亜戦争といずれも、不幸の時だけである。とくに、大東亜戦争にはいつてからというもの、絶えず、日本銀行が日本の戦争経済のための、資金の需要をまかなうこととなり、市中銀行をとおして、民間産業の間接的な取引関係をもつようになり、こんにちにいたっている(中略)日本銀行に閑古鳥がないときのほうが、国家も国民も幸せというものだ。

■就職と結婚と退職—新入社員の心構え

こういう時代であったから、今日のような就職のための勉強などということは、全然考えられなかった。大学はウンノウ(蘊奥)をきわめるところとされていた。したがって、なにか基礎的なものを身につけようという気持ちで、できるだけ間口をひろく、基礎的学問を勉強しておいて、社会人となった場合、それをひきだしからだして、役にたてようと考えていた。(中略)学校をでて、会社にはいれば、すべてABCから実務を勉強しなければならない。その際、たいていの青年は、『こんな仕事はバカバカしい。おれには役不足だ』と考えるものである。このような状態が、だいたい十年はつづくものと思わなければならない。この十年間を、不平、不満—役不足をかこつだけで、勉強を怠っていると、次の十年、十五年の第二段階にはいつたとき、こんどは、逆に自分の力不足を感じ、のびなやんでしまう。だから、最初の役不足だと不満を感じる十年間に、一生懸命、努力をして力をやしなっておくことを怠ってはならない。(中略)『先輩の指導を、自ら進んでうけなさい』。(中略)先輩がやかましくいつてくれるときが、一番進歩しているときだと思うのである。(中略)先輩から、なにも叱られない、投げつけてもらえないのは、自分の不幸だと思いなさい。

ちょっとMEMO: 大正八(1919)年東大へ進学した嘉平太氏は、第一高等学校のボート部の2年先輩に誘われ、「新人会」の集会に1年半ほど参加し、共産主義の勉強をしました。新人会は、吉野作造東大教授らの指導のもと宮崎龍介らが創設、昭和の初めまで日本学生運動の中心的存在。宮崎龍介は宮崎滔夫の子息で、嘉平太氏の一高～東大の先輩で、東大在学中に大陸に渡り、中国事情を探って帰国、新人会、アジア学生連盟などを組織しました。嘉平太氏は、宮崎氏が、「5年以内に日本は革命を起こさなければならない」という演説を聴き、一般大衆と気持ちがかげ離れたやり方で成功するだろうかと疑問を持ったと記しています。



編集・発行：岡崎嘉平太記念館

〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川4860-6 きびプラザ内

TEL 0866-56-9033 FAX 0866-56-9066

ホームページ <http://www.okazaki-kaheita.jp>

Eメール okmh@okazaki-kaheita.jp

2015年1月発刊